# 日本の被爆 80 年とラテンアメリカおよび
# カリブ海諸国の非核兵器地帯としての役割

英利外務大臣政務官挨拶

（２０２５年６月９日（月））

ダルトン大使並びに各国大使、湯崎広島県知事、大石長崎県知事、御列席の皆様

外務大臣政務官の英利アルフィヤです。日本政府を代表し、「原爆投下80年セミナー：非核兵器地帯としての中南米地域の役割」の開催を、心より歓迎いたします。また、中南米諸国グループ（GRULAC）がへいわ創造機構ひろしまと連携し本セミナーを開催するに当たり、議長を務めるダルトン駐日エルサルバドル大使を始め、関係者の皆様の御尽力に敬意を表します。

中南米諸国と日本は、長年にわたる友好・協力関係に加え、自由、民主主義、法の支配といった価値や原則を共有しており、歴史の転換期にある国際社会において、対話と協力を強化しています。

昨年はG20ブラジル議長、APECペルー議長、本年もコスタリカのOECD議長やブラジルのCOP30主催と、主要な国際フォーラムを主導する中南米は国際場裏における日本の頼れるパートナーです。私も2月のペルーに続き、エクアドルとベリーズを訪問したばかりであり、地球の反対側にある両国との深い友情を実感し、重要なパートナーとしてさらに連携していくことを確認しました。

国際秩序が深刻な挑戦を受ける中で、日本と中南米諸国が、グローバル・ガバナンスを強化し、より良い世界に向けて協働することが、ますます重要になっています。日本が進める「中南米外交イニシアティブ」においては、中南米との連携を深化させる分野の一つとして、核軍縮・不拡散を掲げています。

本年は、広島・長崎に原子爆弾が投下されてから80年の節目の年に当たります。80年前、広島と長崎では、数多くの尊い命が一瞬にして奪われ、一命をとりとめた人々も、筆舌に尽くしがたい苦しみを背負いながら歩んでこられました。以来、国際社会は、あのような惨禍を二度と繰り返させないため、軍縮・不拡散の取組を進めてきました。

しかし、現下の情勢に目を向けてみると、国際安全保障環境は厳しさと複雑さを増し、核軍縮をめぐる国際社会の分断は深まり、核兵器使用のリスクも高まっています。核兵器の脅威は、もはや遠い過去の出来事ではなく、現実の脅威として、私たちに迫っています。

しかし、こうした中だからこそ、80年にわたる核兵器不使用の記録を維持するとともに、「核兵器のない世界」に向けた歩みを進めることが、今ほど求められている時はないと思います。唯一の戦争被爆国である我が国は、中南米諸国とも緊密に連携しつつ、そのような国際社会の取組を主導していく決意です。

私（英利政務官）は幼少期を北九州市で過ごしました。北九州市は、広島の次の原爆投下の候補となっていた場所であり、そのため、毎年８月９日に平和祈念式典が開催されています。そうした生い立ちもあり、私は、「核兵器のない世界」の実現に対して並々ならぬ強い思いを持っております。

唯一の戦争被爆国である日本と世界初の非核兵器地帯である中南米諸国。
我々が「核兵器のない世界」という共通の目標に向けて、共に歩みを進めることの意義は極めて大きいと確信しています。

被爆８０年の節目の時に、共通の目標に向けて我々が歩むべき道のりについて、日本と中南米諸国の関係者で、活発に議論が行われ、有意義なセミナーとなることを心より願っております。

御清聴ありがとうございました。

（了）